

「批判的思考力」の育成に向けた 生徒の主体的・対話的で深い学びの充実

指導主事 上村 謙太郎

研究協力員 山鹿市立鶴城中学校 教諭 佐伯 綱義

1 研究主題について

山鹿市立鶴城中学校の学校教育目標は、「豊かな心と確かな学力を兼ね備え 夢に向かって逞しく生きぬく生徒の育成」である。また、目指す生徒像は以下のとおりである。

- ①自他を大切にし、心豊かな生徒
- ②進んで学び、確かな学力を持つ生徒
- ③健康に留意し、逞しく生きぬく生徒
- ④地域と連携し、感動を与える生徒

上記の②に関して、協力員との協議のもとで、本研究における「これからの社会に求められる資質・能力」を「批判的思考力」と設定した。さらに、「批判的思考力」を見取るために、生徒の実態を踏まえながら定義付けを行った。そして、「社会的な課題について、様々な視点から注意深く考える力」とし、検証を図ることとした。

2 研究の視点

今回、中学校社会科では、生徒の「批判的思考力」の育成に向け、主体的・対話的で深い学びを充実させることに取り組んできた。

ここで、生徒の「これからの社会に求められる資質・能力」として設定した「批判的思考力」の育成を目指した主体的・対話的で深い学びを充実するための取組について、三つの視点から述べる。

(1) 視点1「学びを引き出す」について

本単元は、世界と比べた日本の人口に関する特色を理解させることをねらいとしている。その中の「少子化」という課題に対しては、生徒が住む地域にも当てはまる。そこで、生徒が社会的事象を自分事として捉えることができるような問いを設定することにより、本単元の学習に生徒がより主体的に取り組むことができるようにしたいと考えた。

単元の前半部分においては、世界と比べた日本の

人口の特色や過疎・過密地域の課題について学習を進めた。そして、単元の後半部分において、前半部分の学習で生徒が獲得した価値観を覆すとともに、地域に目を向けさせるような問いを提示した。この取組によって、課題解決的な学習の中で、主体的・対話的で深い学びが行われることを目指し、生徒の「学びを引き出す」こととした。

(2) 視点2「学びを振り返る」について

生徒の資質・能力を育むためには、教師のみならず、生徒自身が考えの変容を見取ることができるようにするとともに、資質・能力の高まりを意識できるようにすることが必要である。

そこで、本研究では、学習前後の意見を比較することができるようなワークシートを活用することにより、考え方や意見の変容を視覚的に捉えられるようにした。また、振り返りに関しては、学習内容を振り返るだけでなく、資質・能力に関する自己評価を行わせることにより、生徒自身が資質・能力を意識できるようにした。これらの取組によって、思考過程の可視化と振り返りを行い、生徒の「学びを振り返る」手立てとした。

(3) 視点3「学びを支える」について

意見交換や討論など、生徒の言語活動を充実させるためには、生徒一人一人が根拠を明らかにしながら自分の考えを持つことが必要である。

そこで、本研究では、三角ロジックという共通の手法を活用することにより、全ての生徒が根拠を明らかにしながら自分の考えを持つことができるようにした。また、学習内容だけでなく、学習活動の方法を全ての生徒が把握できるように、視覚化や共有化の観点からICTの活用を図った。さらに、生徒が安心して意見交換したり、討論したりすることができるようにするために、学習形態や班編成の工夫を行った。これらの取組によって、全ての生徒が根拠を明らかにしながら自分の考えを持ったり、伝え

たりすることを目指し、生徒の「学びを支える」ととした。

3 研究の実際

中学校 第2学年 地理的分野
単元名 「世界から見た日本の人口」

(1) 本単元の授業設計

本単元は、世界的視野から日本の人口と人口密度、少子高齢化の課題を理解させるとともに、国内の人口分布、過疎・過密問題を取り上げ、日本の人口に関する特色を大観させることをねらいとしている。

「少子化」という課題は、生徒が住む地域にも当てはまる。本単元の学習を通して、自分の住む地域にも目を向けさせたい。そこで、地域に目を向けさせるとともに、批判的思考力を育成するという観点から、生徒が獲得した価値観を覆すような学習課題を提示することにした。

① 単元の指導計画

時	学習活動	評価及び研究の視点
1	「世界の人口分布と変化」 世界の人口の推移から、発展途上国と先進国の人口の分布などの特色や課題について考える。	世界の人口ピラミッドから発展途上国と先進国の違いを読み取っている。 【資料活用の技能】
2	「日本の人口と人口問題」 世界と比べた日本の人口の特色と少子化が起こる背景について考える。	日本の人口ピラミッドから、日本の人口の変化や分布の特色を読み取るとともに、その背景について考えている。 【思考・判断・表現】
3	「日本の過疎・過密問題」 日本の過疎・過密地域の課題について、身近な例を通して考える。	過疎・過密地域の人口ピラミッドを読み取り、それぞれの問題点について考えている。 【思考・判断・表現】
4	日本にとって少子化は本当に悪いのか 学習課題について、資料を活用しながら肯定側・否定側の二つの立場から考える。	資料を根拠としながら、肯定側と否定側の両方の意見を考えている。 【思考・判断・表現】 視点1 ①生徒が第3時までに獲得した価値観を覆すために、書籍を通じて生徒に「少子

		化は本当に悪いのか」という学習課題を与える。 ②少子化は悪い、悪くないという両方の立場で考えさせることで、地域に目を向けつつ、自分の意見を持たせる。
5	ディベート的な討論を通して、少子化の問題点や利点について考える。	ディベートを通して、少子化の問題点や利点について考えるとともに、自分の住む地域の現状を見つめ直している。 【思考・判断・表現】 視点2 ③最初の意見とディベート後の意見を比較できるようなワークシートを活用し、考えや意見の変容を見取ることができるようにする。 ④振り返りの場面において、学習内容を振り返るだけでなく、考え方や資質・能力についての自己評価を行わせることで、生徒自身が批判的思考力を意識できるようにする。 視点3 ⑤全ての生徒が学習内容や学習活動の方法を視覚的に捉えることができよう、ICTの活用を図る。

② 言語活動の充実

本研究では、生徒の批判的思考力を育成するために、3-3 ディベートを取り入れた。3-3 ディベートでは、全ての生徒が学習課題に対する肯定側・否定側・判定側の三つの立場を経験する。それぞれの立場を経験することで、一つの視点からだけでなく、様々な視点から注意深く考える力、つまり、批判的思考力を身に付けさせたいと考えた。

また、全ての生徒が自信を持って自分の意見を伝えることができるようにするために、ワークシートの工夫を行った。その際、主張・根拠・理由付けという三角ロジックに沿った枠を設けた。さらに、自分自身の考えを批判的に見て、質問項目を予測させる活動を取り入れ、ディベート時の反論に対する生

徒の不安を取り除くようにした。

(2) 指導の実際

ここでは、指導計画の第4時と第5時（検証授業）について述べる。

第4時

まず、これまでの学習を振り返ることから始めた。これまでの学習では、少子化や過疎・過密地域の課題について学習してきた。次に、これまでの学習を通して獲得した価値観を覆すような学習課題「日本にとって少子化は本当に悪いのか」を提示した。そして、七つの資料が載ったプリントを生徒に配付し、それらの資料を基に、肯定側（少子化は悪い）・否定側（少子化は悪くない）の両方の立場から考えさせた。以下は、生徒が実際に書いた意見である。

生徒A

【肯定側立論】

<根拠>

資料（1）から、高齢者一人を支える若い世代の人数がどんどん減っていくことが読み取れる。

<理由付け>

少子化が進めば、高齢者を支える若い人の負担は大きくなり、高齢者も困る。

<主張>

よって「少子化は悪い」と主張します。

【否定側立論】

<根拠>

資料（3）から、高齢者がお金をたくさん使っていることが読み取れる。

<理由付け>

少子化が進めば、経済は悪くなる。しかし、高齢者の方に商品を売っていけば、経済を回復することができる。

<主張>

よって「少子化は悪くない」と主張します。

生徒B

【肯定側立論】

<根拠>

資料（7）から、鶴城中の生徒の人数がどんどん減っていることが読み取れる。

<理由付け>

学校が閉校になってしまい、他の学校に通わなければならなくなる。

<主張>

よって「少子化は悪い」と主張します。

【否定側立論】

<根拠>

資料（5）から、熊本市ではヒートアイランド現象や排気ガス、ごみなどの問題が多いことが読み取れる。

<理由付け>

少子化が進めば、ごみや二酸化炭素が減って、環境問題も少なくなっていく。

<主張>

よって「少子化は悪くない」と主張します。

第5時

① 本時の目標

3-3 ディベートを通して、主張・根拠・理由付けを明らかにしながら自分の考えを表現するとともに、社会的事象における課題を多面的・多角的に考察することができる。

② 本時の展開

過程	学習活動	指導上の留意点 及び評価	備考
導入 5分	1 本時の課題を把握する。 (1) 前時を振り返る。 (2) 3-3 ディベートの流れを確認する。	○前時までの内容と学習課題を確認する。 徹底指導 (ポイント) ○人口に関する知識を押さえる。 ○ディベートの流れを板書し、生徒がいつでも確認できるようにする。	ICT 流れを示した紙
展開 35分	これからの日本において少子化は悪い、悪くない。どちらか？		
	2 自分の意見を確認する。	○個人で、肯定側・否定側の意見の見直しをさせる。	ワークシート
	3 3-3 ディベートを行う。 【言語活動】 (設定の意図) 肯定側・否定側の両側の立場から意見を伝え合う活動を通して、批判的思考力を育成する。	能動型学習 (ポイント) ○肯定側・否定側には、主張・根拠・理由付けを明確にして意見を伝えさせる。また、判定側には、判定理由を明確にして勝敗を付けさせる。	
	4 最終的な意見をまとめる。	○学習課題に対して、肯定か否定か、最終的な意見を主張・根拠・理由付けの形式でワークシートに記述させる。	
整理 10分		評価：思考・判断・表現（ワークシート） B基準 根拠・理由付けを明確にして、自分の主張を書いている。	
		A基準 B基準に加え、両側の意見を比較しながら、少子化の課題や利点を踏まえて書いている。 <B基準に達していない生徒への手立て> ○ディベートを通して、何を感じたかを個別に聞き、意思決定を促す。	
	5 本時の学習を振り返る。	○ディベートを通して学んだ考え方や表現方法を振り返らせる。	

以下は、3-3 ディベート後の生徒A・Bの最終的な意見である（下線筆者）。

生徒A

<根拠>

資料（1）から、高齢者を支える若い世代の人数が減っていることが分かります。

<理由付け>

人口ピラミッドを見ても、子供が少なく、高齢者が多いです。だから、これからもっと若い人の負担は大きくなると言えるでしょう。

<主張>

よって「これからの日本において少子化は悪い」と主張します。

生徒B

<根拠>

資料（1）から、高齢者を支える若者が減り、若者の負担が増えていることが分かります。

<理由付け>

これからさらに高齢者を支える若者の負担が大きくなることが言えるでしょう。

<主張>

よって「これからの日本において少子化は悪い」と主張します。

生徒Aは、第4時において、高齢者一人を支える若い世代の人数の変化を示す資料を根拠に、肯定側立論を行っていた。第5時においては、同じ資料を根拠に肯定側の立場を選択した。しかし、理由付けにおいて、これまでの学習で学んだことを加筆していた。生徒Bは、生徒Aと同様、最終的に肯定側の立場を選択した。しかし、第4時とは異なる資料を根拠としており、3-3 ディベートを通した考えの変容が見られた。

(3) 検証結果と考察

この授業実践においては、社会科学習に関する意識調査（4件法：16項目）を実施し、学習前後における回答の分析・検証を行った。以下は、特に高まりが見られた項目について示したものである。

- 質問1 社会科の授業を通して知ったこと、できるようになったことが、他の授業や普段の生活の中で活用できるのではないかと考えるようにしている。
- 質問2 社会科の授業の中で、これまでの学習や経験をいかして自分の考えを持つことができています。
- 質問3 社会科の課題を解決するときに、一つのやり方だけでなく、別のやり方がないか考えるようにしている。
- 質問8 グラフや表などの資料や文章などを、自分の考えを持つために役立てている。

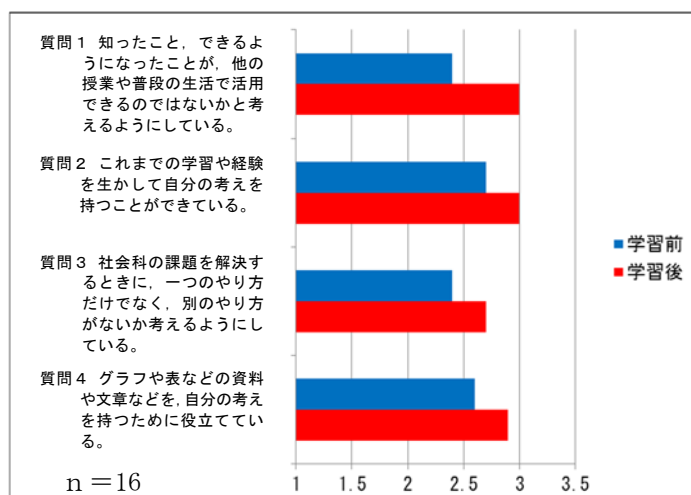


図1 学習前後の意識調査の結果（一部抜粋）

【視点1】

意識調査における質問1の項目に高まりが見られたことから、社会的事象を自分事として捉えることができるような問いを設定したことで、知ったことやできるようになったことを普段の生活で活用しようとする態度が育まれたと考えられる。また、質問2、3の項目に高まりが見られたことから、これまでの学習において生徒が獲得した価値観を覆すような問いを設定したことで、既習事項や経験をいかしながら、様々な方法で課題解決を行うことができるようになったと考えられる。

【視点2】

以下は、第5時において、生徒が書いた振り返りの内容をまとめたものである。

生徒C	少子化が進めば、高齢者を支える若者の負担が大きくなるという課題がありますが、環境問題は少しよくなると感じたので、良い点もあると思います。
生徒D	最初は少子化の良い点について考えていませんでした。しかし、〇〇さんの説得力のある反論を受け、改めて少子化の良い点を考え、理解することができました。
生徒E	相手の話を聞きながら反論することは難しかったです。同時に、自分の意見を伝えなければならなかったことで、頭が混乱しました。様々な視点から、冷静に考えていくようにしたいです。

生徒Cの振り返りには、「良い点もあると思います」生徒Dの振り返りには、「改めて少子化の良い点を考え、理解することができました」と書かれており、社会的事象を多面的に見ることができるようになった。

たと考えられる。また、生徒Eの振り返りには、「様々な視点から、冷静に考えていくようにしたい」と書かれており、批判的思考力の必要性を実感したことが分かる。これらのことから、社会的な課題について、様々な視点から注意深く考えようとする態度が育まれたと考える。

さらに、以下は、意識調査の批判的思考力に関わる項目の結果である。

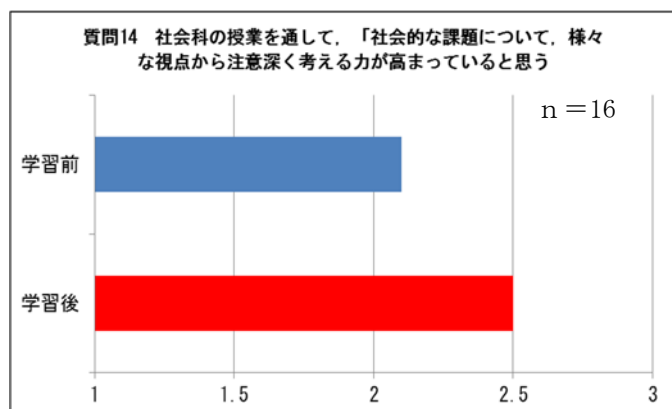


図2 意識調査の結果（批判的思考力）

この意識調査の結果から、生徒の批判的思考力の高まりを確認することができた。

【視点3】

この授業実践では、全ての生徒が根拠を明らかにしながら自分の考えを持つことができるように、三角ロジックという手法を活用した。第4時、第5時のワークシートを見てみると、全ての生徒が根拠を明らかにしながら、自分の考えを持つことができていた。また、意識調査における質問8の項目に高まりが見られたことから、根拠を明らかにしながら、自分の考えを持つことができるという自信が更に付いたと考えられる。

以下は、第5時で生徒が書いた振り返りの内容をまとめたものである。

生徒F	相手の意見をしっかり聞くことで、意見がより深まると感じました。また、相手を納得させるためには、自分の意見をきちんと持つことが重要だと思いました。
生徒G	自分が考えもしなかった考え方を聞くことができたので、新しい考えを作り出すことができた。

上記の振り返りから、生徒は考えを深めたり、新しい考えを創造したりすることができたと分かる。このことから、肯定側・否定側・判定側のそれぞれの立場を経験するディベートを行わせたことで、生

徒は考えを深めたり、新しい考えを創造したりすることができたと考える。

4 研究のまとめ

昨年度の研究の主題点は、当事者意識を生む「問い」や意志決定型の「問い」により、多様な価値観を持った他者と協働しながら学び合い、社会参画力という求められる資質・能力が育まれるかどうかを検証した。その結果、生徒の社会に参画しようとする意識の向上や行動に変化が見られた。

そして、本年度の研究の主題点は、生徒が社会的事象を自分事として捉えることができるような「問い」の設定やワークシート、振り返りの工夫、学びのUD化等の手立てを講じることにより、これからの社会に求められる資質・能力が育まれるかどうかを検証するものであった。

生徒は、自分たちが住む地域にも当てはまる「少子化」というテーマの下、社会的な課題について様々な立場から考えるとともに、根拠や理由付けを明らかにしながらディベートを行い、資質・能力の高まりを実感するに至った。

また、本研究においては、カリキュラム・マネジメントの観点から、学校教育目標を基に資質・能力を設定した。以下は、意識調査のカリキュラム・マネジメント（CM）に関わる項目の結果である。

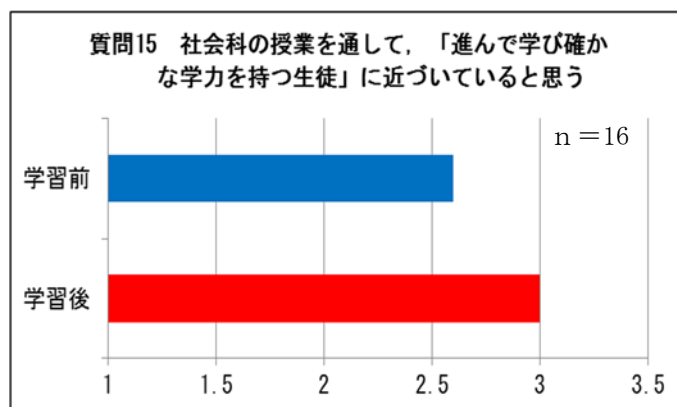


図3 意識調査の結果（CM）

この意識調査の結果から、学校教育目標を基に求められる資質・能力を設定し、その育成に向けた主体的・対話的で深い学びの充実を図ることは、学校教育目標の具現化につながると確信した。

《引用・参考文献》

- ・赤川学（2004）『子どもが減って何が悪い！』ちくま新書